慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

第19回慶應医学賞授賞式・受賞記念講演会開催

慶應医学賞は1996年から始まった慶應義塾医学振興基金の主要事業の1つである。過去には本賞受賞者からノーベル賞受賞者を6名輩出しており、国内外からの注目は大きい。

11月27日、第19回慶應医学賞受賞者であるカール ダイセロス博士（米国スタンフォード大学教授、HHMI研究員）、濱田博司博士（大阪大学大学院生命機能研究科教授）を信濃町キャンパスに迎え、慶應医学賞授賞式および受賞記念講演会、記念レセプションが開催された。

医学部管弦楽団の演奏の中、別役智子教授の司会進行により開会された授賞式は、岡野栄之審査委員長による審査報告と受賞者紹介から始まった。ダイセロス博士は「光遺伝学の実現と神経回路制御による脳機能解明」によって、濱田博士は「左右軸を中心とした哺乳動物胚発生の分子制御機構」によって、学内外約90名による厳正な審査を経て選出された。

続いて清家篤塾長から、両博士に賞状とメダル、目録が授与された。清家塾長は両博士の功績を称え祝福し、この賞の意義について「これを受賞する人の名誉であると同時に、慶應義塾にとっても大変名誉である」と語った。

また、来賓として山中伸一文部科学事務次官、キンバリー・S・バー駐日米国大使館 経済・科学部 科学技術・環境・医療課長補佐一等書記官より祝辞が述べられた。

続いて受賞者からの挨拶でダイセロス博士は、生物学の領域から医学に全く関係のない領域に及ぶ、ばらばらの糸口から光遺伝学（Optogenetics）発見に至ったという経緯、そして、患者の苦しみを少しでもやわらげ希望を与えられるよう、さらに研究を発展させていく決意を語った。

濱田博士は、20年前に偶然始まった研究の結実は、若い研究者のアイデアと貢献によるものであると感謝の意を示し、今後若い研究者が興味を持って研究を引き継いでいくことへの願いの言葉で締めくくった。

受賞記念講演会は末松誠医学部長による挨拶から始まり、会場は世界の第一線で活躍される両博士の貴重な講演を聴くため集まった約250名の聴衆で満席となった。各講演後は活発な質疑応答が行われた。

夜には記念レセプションが盛大に行われた。清家塾長、学外審査委員の御子柴克彦シニアチームリーダー（独立行政法人理化学研究所BSI）より祝福の言葉があり、両博士をはじめ、参加者は大いに歓談した。

授賞式後の記念撮影（左から岡野教授、ダイセロス博士、濱田博士、清家塾長）

第94回慶應医学会総会・シンポジウムを終えて

慶應義塾大学医学部臨床遺伝学センター教授　小崎　健次郎（68回）

平成26年11月7日、2号館11階大会議室において、慶應医学会シンポジウム『ゲノム医学と医療システム』が開催されました。慶應義塾大学病院・医学部を含む医学コミュニティにおける、現在のゲノムデータ・ビッグデータの利用の診療応用に向けた取り組みを多角的に紹介されました。分野横断的な内容であったためか、多数の教室からのご来場いただきました。

はじめに、臨床遺伝学センターの小崎より、各診療科領域において、「診断不明の症例」ないし「希少疾患の非典型例と考えられる症例」ときれている患者さんに対して、網羅的遺伝子診断を行い、その結果によって鑑別すべき疾患を絞り込み、確定診断を行うプロジェクトについて紹介いたしました。診断不明例の100例の解析を終えたところで、診断率は3割程度でした。循環器内科学教室の相澤義泰先生には遺伝子診断の結果に応じて不整脈の医療管理をパーソナライズする具体的な方法についてご紹介いただきました。産婦人科学教室の佐藤卓先生にはゲノム情報を生殖医学に適用する試みとして着床前診断の最新の技法について紹介をいただきました。特に単一細胞からゲノム全体を増幅する新しい方法論についてわかりやすい説明を頂きました。医療政策・管理学教室の吉村公雄先生には、ゲノム情報とビッグデータを組み合わせて新たな知見を得るための多遺伝子遺伝の解析方法について、がん研究分野での実績をお示しいただくとともに、得られた統計モデルをどのように診療に生かすかについて示唆に富むお話をいただきました。

後半では、遺伝学的手法により、疾患の発症機構が解明されつつあることを受けて、いかに稀少疾患の創薬研究に結びつけてゆくか、先端医科学研究所 遺伝子制御研究部門 佐谷秀行先生にはアカデミア創薬の意義と将来像についてこの分野において慶應医学が歩むべき明確な道筋と展望をお話いただきました。さらに坂口光洋記念 システム医学講座 教授の洪実教授には病院・医学部を挙げて取り組んでいる、JSTのセンター・オブ・イノベーション（COI）プログラムについてご紹介をいただきました。慶應医学会・三四会のコミュニティにおける先進的な取り組みを日本全国に発展させるという意欲的なプロジェクトについて、開始後2年間の成果と、今後のロードマップについてお示しいただきました。慶應発のイノベーションを通じて、日本と世界の医療システムを先導しようという情熱を感じさせるプレゼンテーションでした。

最後に、慶應義塾大学医学部 朝日新聞社 先端医療情報イノベーション講座 共同研究員の田村建二氏には先端医療、特にゲノム医療の光と影について、ジャーナリストとしての鋭い切り口でご発言いただきました。シンポジウムの後の懇親会では、慶應医学として取り組むべき課題とその解決法について、講演者や参加者が熱っぽく語り合っていたことが印象的でした。

シンポジウム会場の様子

当日司会を務めた筆者（小崎）

北島政樹名誉教授 第6回日本ハンガリーポーランド外科学会を成功裏に開催

北島政樹名誉教授（外45回、国際医療福祉大学学長）は、2014年10月17日～19日、三田キャンパス東館ホールにて第六回日本ハンガリーポーランド外科学会を成功裏に開催しました。

本学会は2000年、北島政樹名誉教授とハンガリー・セメルワイス大学外科のジョセフ・シャンドール教授が東京で会談し、日本とハンガリーの外科領域での学術的振興を深め、両国国民の福祉向上に寄与することを目的に創設されました。2001年に記念すべき第1回日本ハンガリー外科学会がハンガリーの首都ブダペストで開催されました。SARSの世界的流行により一時中止となっていましたが2006年9月、六本木アカデミーヒルズで第2回の学術集会が開かれ、この回から吉田昌客員准教授（外69相当、国際医療福祉大教授）と私の2人で事務局長を仰せつかっています。以後2年ごとにハンガリーと日本とで交互に行われていますが、北島政樹名誉教授とシャンドール教授のリーダーシップにより参加者数も回を重ねるごとに増加しています。

日本ポーランド外科学会は、日本国内の外科系学会の際に共同開催する形で以前より行われていましたが近年はほとんど活動実績がない状態になっていました。そこでポーランド外科学会名誉会員で、ポーランド・ヴロツワフ大学より名誉博士号を授与されポーランドに数多くの友人を持つ北島政樹名誉教授にポーランド外科学会より打診がありました。第5回日本ハンガリー外科学会（2012年10月、於ブダペスト）の際にヴロツワフ大学のキーラン教授を招き三カ国共同で学術交流を続けていく方針が確認されました。

今回はポーランドと合同開催となって初めての学術集会となりましたが、演題数は147（日本64、ハンガリー57、ポーランド26）、参加者数178名と過去最大となりました。ポーランドからウォールナー教授（ルブリン大学、ポーランド外科学会会長）のご尽力により数多くの演題が登録されました。今年は、本学会創設時から大きく貢献された故・大谷吉秀先生（外60回）の七回忌にあたり、故人を偲んでメモリアルシンポジウムが行われました。生前親交の深かったシャンドール教授、キーラン教授、西田俊郎先生（国立がん研究センター東病院院長）と、一般・消化器外科胃班で共に低侵襲治療の開発に取り組んだ古川俊治教授（外66回、参議院議員）と私がシンポジストを務めました。大谷吉秀先生の業績を振り返り、先生が取り組まれた胃外科を中心にこの7年間の進歩と将来を展望する意義深いものとなりました。

北川雄光教授（外65回）は招請講演で、食道癌に対する低侵襲手術の現状と将来展望を講演しました。この分野は日本が世界をリードする分野であり、その第一人者である北川雄光教授は教室の最先端の業績も含め内容の濃い講演を行い参加者より賞賛を浴びました。

綱町三井倶楽部で開催された会長招宴ではポーランド大使のコザチェフスキ氏とハンガリー公使のエルドゥーシュ氏をお招きして盛大に行われました。比企能樹理事（三七回、外、連合三田会会長）もご出席になり、名誉博士号を授与されたヴロツワフ大学をはじめポーランド・ハンガリー両国の親友と旧交を温めていらっしゃいました。会長招宴と同時刻に、三田キャンパス北館のファカルティクラブで若手参加者のための懇親会が開催されました。日比泰造助教（外77回）の素晴らしい企画と活躍により三カ国の若手外科医が親交を深める絶好の機会となりました。

日本ハンガリーポーランド外科学会は三四会の諸先生方のご尽力により、慶應義塾が牽引してここまで発展してまいりました。この場を借りて厚く御礼申し上げますとともに、引き続きご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（和田則仁　外71回）

三田キャンパス東門での集合写真

慶應義塾大学病院による、一般市民向け前立腺がん啓発イベント

〝PSAスクリーニングキャンペーン〟を開催して

本年10月5日に、慶應義塾大学病院主催により開催された、前立腺癌の早期発見のための啓発イベント〝PSAスクリーニングキャンペーン〟についてご報告致します。

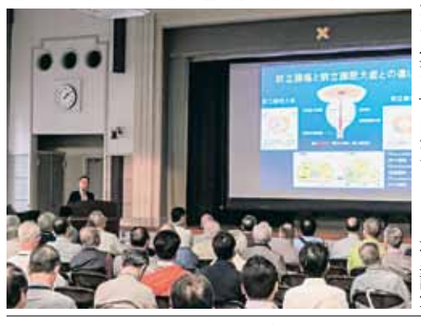
現在、前立腺癌は欧米諸国において、男性の癌罹患率第1位の主要な癌ですが、本邦でも増加傾向にあり、2020年に男性の癌罹患率第1位になることが想定されています。早期発見できれば手術・放射線療法により完治が可能になってきましたが、本邦においては前立腺癌への関心がそれほど高いとは言えず、早期発見のためのPSA（Prostate Specific Antigen: 前立腺特異抗原の略で前立腺癌の腫瘍マーカー）検診の暴露率が低く、未だに癌が進行した状態で見つかる患者さんが多い現状です。

この現状を鑑み、昨年からPSA検診の重要性を伝え、前立線癌の早期発見に寄与したい、また地域医療に貢献したい、という大家教授をはじめ当泌尿器科教室員の情熱から啓蒙活動を開始し、本年で2回目となりました。中央臨床検査部の検査技師の方々や医療事務室の方々の多大なるご尽力もあり、北里講堂において〝PSAスクリーニングキャンペーン〟の開催となりました。キャンペーンの案内は、慶應病院ホームページや慶應病院内・新宿区医師会の病院・医院・信濃町商店街、JR信濃町駅でのポスター掲示・配布に加え、今年は全国規模での朝日新聞のPSAスクリーニングキャンペーンとも連携して周知しました。

当日はあいにくの雨で肌寒い天候でしたが、138名の参加がありました。最初の1時間の市民公開講座では、大家教授の熱意あふれる分かりやすい講演に、参加者は非常に熱心に聞き入っていました。その後、医師による問診後にPSA採血を講堂後方で行いました。Q&Aコーナーを設け、採血の合間に希望者に対して、質問や相談を受け付け、当科のスタッフや専門医が対応しました。日ごろの疑問や悩み相談に真摯に対応し、大好評でした。

昨年の経験を生かした事前準備の成果もあり、円滑に、事故なく、無事にイベントを遂行することができました。参加者に対するアンケートの集計結果からは、検診の重要性が理解できた、家族や友人に勧めようと思った、慶應病院主催の公開講座にまた参加したい、という参加者からの声が多く聞かれ、反響の大きさを痛感しました。教室員一同、引き続き、今後もがん早期発見に対する啓蒙活動を継続し、少しでも地域住民の皆様の医療福祉の向上に貢献したいと考えております。

（小坂威雄　79相当）



慶應義塾大学病院 年末年始の休診

年末年始は、12月30日（火）より1月4日（日）の間休診と致します。

病院長

「医学部新年祝賀式」および「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金に基づく慶應医学賞医学研究奨励賞授賞式」の開催について（ご案内）

医学部新年祝賀式

医学部長　末松　誠

医学部では毎年新春に教職員および三四会員による祝賀式を催しておりますが、この度、新年祝賀式を下記により開催することにいたしました。新春早々ご多用のことと存じますが、ご都合をお繰り合わせのうえ、ご出席賜りますようご案内申し上げます。

なお、本祝賀式と併せ「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金に基づく慶應医学賞医学研究奨励賞授賞式」を執り行います。

記

日時　平成27年1月5日（月）13時から15時30分
場所　2号館11階　大会議室

シリーズ「募金の声」

母校医学部を愛する気持ちを、募金という形で

三四会募金委員会幹事・慶應義塾大学医学部耳鼻咽喉科同窓会会長
三四会中野支部支部長　池田　美智子（47回）

私は慶應義塾女子高等学校から塾にお世話になり、医学部に推薦入学、卒業後耳鼻咽喉科教室に入室、国立東京第二病院で約20年間勤務の後、東中野で耳鼻咽喉科を開業して現在に至っています。

先般の塾創立150年、また3年後の医学部創立100年を迎えるに当たり、私自身も塾での思い出を振り返る良い機会になりました。父は、私が幼い頃から「公立学校は税金で賄っているのだから」と、子どもは全員小学校から大学まで私立に入学させられました。経済的に余裕のある場合は、私立に行くべきと言う考え方だったのでしょう。玉川学園小学部、中学部で自由な校風のもとでのびのびと過ごしましたが、慶應義塾女子高等学校もまた、素晴らしく自由闊達な学校でした。お互いが個性を重んじて認め合っていたように思います。医学部も然り。こうした塾の「独立自尊」の教えを授かったことを感謝しています。

開業医にとって、日常診療で診断や治療に難渋した際、安心して患者さんを紹介できる信頼に足る母校の病院の存在は心強く有難いことです。また、地域の医師会で他大学の先生方との交流の中で、「先生は慶應出身だから」とよく言われることがありますが、そんな時は、慶應義塾大学医学部の一員であることを自覚させられ、誇りに思います。

一口に創立150年、100年と言いますが、これは大変な重みのある歴史です。これまでの先輩たちのご尽力と偉大な業績の賜物です。こうした記念すべき時に遭遇できる私達は幸せだと思います。

これまでの母校に対する感謝と、慶應義塾大学医学部が国内に於いては「私学の雄」として、また世界に於いては「世界に冠たる医学・医療」に向かって更に発展するよう願う思いを、医学部創立100年記念新病院棟建設事業募金という形で表そうではありませんか。

追記：三四会では、全国支部長会議を開催し、三四会員の要望・ご意見を伺う機会を設けたり、支部活性化が図られていますが、尚一層の三四会員のためのきめ細やかな日頃の活動をお願いいたします。

新病院棟建設への貢献

～それぞれのカタチ～

小児科　福島　裕之（67回）

未だ新病院棟建設に対して寄付を行えていない私が、おそらく募金を案内するという趣旨の本欄に寄稿してよいものか悩みました。けれども、私への寄稿の依頼は三四会の募金部門から発せられたと想像され、ということはすべてお見通しの上での依頼と考えて、寄稿をお受けすることにいたしました。

新病院棟建設において、私は新病院棟建設実行委員会ならびに新病院棟建設計画プロジェクト推進会議の委員を務めております。また最近は三四会の理事にも就任いたしましたので、新病院棟建設における募金の必要性、重要性はよく承知しております。それにも関わらず未だに私が寄付を行えていない理由は、ひとえに自身の経済的な問題にあります。私事で恐縮ですが、現在高校3年生、中学1年生の息子がおり、いずれも私立の学校に通学しておりますので、大学教員の給与では家族の養育に精一杯の状況となっています。

そこで募金の開始からしばらくの間は、金銭による直接的な寄与の代わりに、自身の時間と情熱とを新病院棟建設に注ぐことで、私なりの貢献をいたしたいと考えました。新病院棟建設関連の委員は、私の所属する小児科学教室を離れた立場でお引き受けしたものですので、仕事量は単に足し算となり、当然ながら以前よりも大学・病院に留まる時間が長くなりました。残念なことに、新病院棟関連の仕事は兼任で、1円のインセンティブもついておりませんので、給与は足し算とはなりません。それでも、新病院棟建設関連委員会の前身である病棟ローリング計画に関する委員会も含めますと、相当な時間と情熱を注ぐことができたと思っています。これまで、私のスタンスを理解し、許容してくださった委員の方々と家族に感謝しております。

さて、我が家の2014年度収支予測を立ててみますと、相変わらずゆとりはないのですが、息子ふたりの学費と妻との小旅行への支出は何とかなりそうな気がしています。そこで、冬のボーナスの一部を新病院棟建設の募金に充てたいと考えました。現時点での計画は、募金期間の目安が2018年3月までであることを意識して、2014年から25万円×4年間＝100万円というものです。すでに高額の寄付をしてくださっている方には心から敬意を表しますとともに、我が家の事情にもご理解をいただけましたら幸いです。

三四会員の方々にも、それぞれ異なった立場や事情があろうかと思います。そして、新病院棟建設の支援に関しても、様々な貢献の仕方があると信じています。建設費用が集まらなければ病院が建たないのは事実ですが、新しい病院に命を吹き込むのはそこで働く人と患者さんです。単に個人の寄付金の多寡を問うのではなく、多くの人が、その人らしい貢献をすることができる雰囲気、仕組みを作ることも重要ではないでしょうか。

ちなみに、ここに書きました募金に関する計画は、まだ家族に話をしておりません。医学部新聞を見た妻の反応が心配です。12月30日も小児夜間救急診療の仕事をして稼いでくるから許してね。

鑑定知恵

私は、依存の治療や研究の世界に長く身を置いてきた。当初、医学の中での依存の存在は、全く小さいものであった。今でも、その事情が大きく変わった訳ではない。しかし、社会問題としての世の中の認識は、医学の中での認識と比較にならない位大きい。この点に関しては、最近、話題になっている危険ドラッグを例に挙げれば十分かもしれない。この薬物は、マスコミで報道されている通り、とても危険である。この危険ドラッグが脱法ハーブと呼ばれていた頃のイメージからか、普通の若者がこれを使っていると思っている人が多い。しかし、危険ドラッグを使っている多くの者は、実は他の薬物の依存者である。また、カジノ法案の審議にからめて、ギャンブル依存問題も大きくクローズアップされている。一方、肥満を依存の一部と捉えていこうとする動きがある。特定の食べ物や食べ物全体に対する依存である。蓄積されている依存の治療方法がこの大きな健康問題に寄与できる日が近く来るだろう。

インターネット依存も近年爆発的に増加している大きな社会・健康問題である。私は、自分の年も顧みないまま、3年前からこのネット依存の専門治療を始めた。診療を始めて驚いたのは、その数の多さと重症度である。ネット依存の疑われる中高生は52万に、ネット依存傾向にある成人は421万人と推計されている。外来患者の大半は10歳代の若者である。彼らは、オンラインゲームやSNS、スマホにはまり、不登校になったり、退学・放校に追いやられるケースが多い。出発地点で、人生が大きく狂う訳である。ネット依存の診療や研究は始まったばかりである。診断ガイドラインはおろか疾患概念も確立されていない。ITテクノロジーの進歩を考えるとこの依存は将来どのようになるのか末恐ろしい。今できることとして、少なくとも診断ガイドラインを作成すべく、WHOに協力して前に進んでいる。

（独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター院長　樋口　進　58相当）